

『純粹理性批判』における自然の統一と理念の統制的使用について

統制的理念に関する仮説主義的解釈の展開

中山 弘太郎（慶應義塾大学）

『純粹理性批判』の超越論的弁証論の附録において、カントは理念の統制的使用に関する議論を展開している。その議論によれば、理念は直接的に対象の客観的認識を与えることはなく、したがって構成的に使用されるべきではないが、私たちの経験的認識を体系化し、科学的探究を導くために、統制的に使用されるといふ。この発表では、自然の統一という構想に着目して、理念の統制的使用の役割と特徴を解明する。私が焦点をあてるのは、自然が科学的探究に対応するような統一的で体系的な存在論的構造をもつと私たちがアプリアリに想定することができるのか、できるとすれば、そうした想定はどのような根拠に基づいているのかという問いである。

理念の統制的使用は二つの異なる理性規則に関わっている。一つ目の規則は理性の論理的原則と呼ばれる規則であり、この規則は条件づけられた認識が与えられた際に、その条件へと遡行し、統一的で体系的な認識のネットワークを形成することを要求する。もうひとつの規則は、条件づけられた対象が与えられた際に、その条件づけられた対象が属する系列の無条件的な総体が与えられるという、理性の超越論的法則である。一方では、伝統的な形而上学に対するカントによる批判は、超越論的法則が無条件的な対象についての正当な存在論的主張を与えないということを明らかにした。すなわち、この法則が存在論的主張のために使用されると、私たちが形而上学的誤謬へと導く「弁証的」なものとなるのである。しかしながら、他方でカントは超越論的法則の想定があらゆる経験的認識にとって不可欠なものでもあると主張している。理性の統制的使用に関する議論は、こうした弁証的性格と不可欠性の間の緊張関係を解消することを目指しているのである。

理性の統制的使用をめぐるのは、伝統的には二つの対立する解釈が提案されてきた。实在論的な解釈は、不可欠性を強調し、超越論的法則が真であることに対するコミットメントを私たちがもっていると主張する。これに対して、虚構主義的な解釈は法則の弁証的性格に焦点を当てる。虚構主義的な理解によれば、「自然が存在論的統一をそなえている」という命題は偽であるが、私たちはこの命題が真であるかのようにふるまい、ヒューリスティックなフィクションとして超越論的法則を扱うべきであるという。近年では、マルクス・ヴィラシェクがこうした二項対立を脱し、真偽へのコミットメントを必要としない仮説として統制的理念を理解する解釈を提案している。確かに、この新しい解釈は理性の構成的使用と統制的使用の差異をとらえてはいるが、伝統的に实在論的解釈の論拠となってきた不可欠性を十分に説明しているとは言えない。

本発表において、私は理性の統制的使用に関する仮説主義的解釈の改訂案を提示する。仮説主義は、統制的理念がたんなる仮説であると主張することとまらず、統制的想定のもつ仮説的地位と経験的認識にとつての不可欠性がどのようにして両立するかを説明しなければならない。私は、チャールズ・サンダース・パースの統制的想定に関する議論に範をとることで、仮説としての統制的理念がもつ特異性を示す。この改訂版の仮説主義によれば、私たちは超越論的法則が真であると主張する必要はないが、科学的探究を合理的なものとして継続するために、そう前提する義務がある。活動としての探求を考慮することによって初めて、論理的原則が超越論的法則を前提するというカントの議論が理解可能なものとなるだろう。